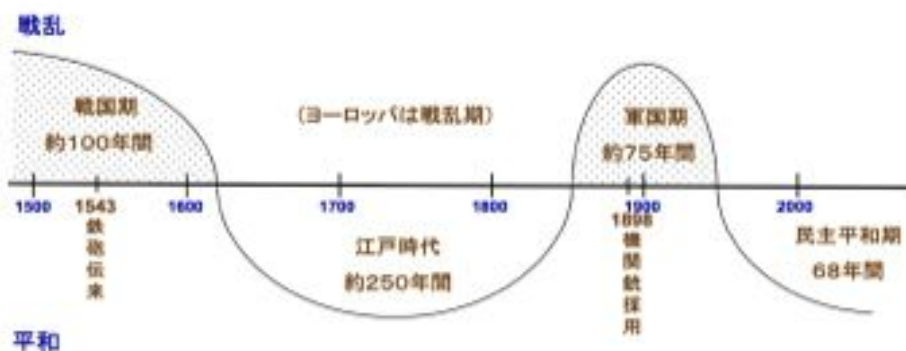


日本人の兵器感覚

日本銃砲史学会会員 須川 薫雄 (しげお)
陸上自衛隊武器学校小火器館顧問

はじめに) 日本の歴史を振り返ると、平和と戦争の期間が際立って分かれている。同じ日本人でありながら、その生きた時代により、生死や人生観、生活と意識は文化まで大きな差があったはずだ。過去 11 カ月間「日本兵器史」を連載した。最終回はそのまとめと、日本人が持つ「兵器感」その国防意識は果たしていかなるものかの分析である。調査やデータのエビデンスがないので、国際的、歴史的な比較はできないが、現象面での分析と捕らえて欲しい。江戸期は鎖国し、戦闘はなかった。武士、侍においても武芸は日常的に行うが公務においては一生、刀を抜かずして終えたものが多かったと言われている。



(平和と戦乱の図 須川 薫雄)

現在、戦後・民主体制は 68 年目を迎えるが、日本は国家・軍隊として武器兵器を発砲し外敵を殺したことは記録ない。このような国家、歴史は世界に存在したのであろうか。「兵器は怖い、兵器は悪い」が国民、一般的に感じている姿でその背景には興味は少ないのが現代だ。日本人は自らを「平和ボケ」と自嘲的に称している。

一方、軍国期 (明治維新から 1945 年まで) 約 4 分の 3 世紀、軍と武器兵器は国家の基幹であり、その開発、製造、運用、勿論徴兵制度を社会基盤とする『富国強兵』策、日本は世界有数の軍国主義国であった。兵器にはなみなみならず執念をもった。応仁の乱に始まる、約 100 年間の戦国時代の日常的戦闘に関してはいくら書いても書ききれない。

現在は、江戸期に似ている。国民の間には兵器は特異なもの、身近なものではないと言う意識が強い。占領軍教育政策とそれを継承した左翼教育がそうさせた

のではないか。従って国民の間に日本の兵器発達史の特異性に対する興味は少なく、「歴史に学び敵を知り己をさとの武器兵器研究」はほとんど一般的には認識されてない。日本は第二次世界大戦まで独自のさまざまな戦闘技が使われた。日本で使われた独自の思想とその兵器の特徴、一年間の掲載のまとめが今回の内容だ。

1、日本の武器兵器歴史的特徴 時代的タイミングの良さと悪さ

昨年4月号テーマは『1600年、世界最強の軍事国家だった日本』だった。火縄銃は戦国期の真ただ中、1543年、タイミング良く日本に伝来し、またたくうちに一般的な武器となった。個人の力や体格の差に影響されない、集団戦の究極、そのような形で戦国時代を終わらせた。日本の火縄銃は江戸期には様々な流派になり、鉄砲がひとつの武芸として武士の嗜みとなった。そういう基盤があったから幕末、戊辰戦争そして明治初期に近代兵器が比較的円滑に運用されるようになった。例えば、日本の火縄銃の特徴のひとつは引き金の位置が極手前にあり、しかも銃把を握り指は伸ばした状態で引き金を引く、梃子の論理を何回も使い、まるでセットしたように微力で引き金を落とす。こういう考え方は後の軍用銃にも適応され三八年式歩兵銃の引き金は独特だった。二段式で、まず引く、止める、そしてタッチするように触ることで落ちる。近代大口徑ライフル射撃経験すると引き金の重要性には測りしれないものがある。(自衛隊員およびOB諸君が経験したとおりだ) 藤岡流の鉄砲(下)



(内部はふたつのゼンマイバネを使用し、引き金の強さ5段階に調整できる)

「大砲類」は別だった。平成 23 年 2 月号テーマは『大砲コンプレックスに陥っていた日本』の状況の通りだった。幕末、独自で大砲理論の理解、製造、運用ができなかったのだ。「大砲は小銃の延長ではない。」まったく違う兵器として捉えられなかったのだ。この原因は西欧の産業革命期に鎖国していたためだ。そのために、物理学、化学とそれらの計算式、他学問的なことの研究及び産業自体が遅れていたのだ。西欧の産業革命は 18 世紀初頭から始まり、基本は動力を使う機械と鉄鋼など金属材料やその他材料の大量生産だった。日本にはその技術がなかった。また騎兵は存在せず、道路などのインフラ整備がされてなく馬による砲の曳引もなかった。

このふたつの現象をみても平和と戦乱の波は一貫した兵器や戦略思想を一旦途切れさせた。2012 年 7 月号テーマは「三十年式兵器（と有坂 成章）」だった。日露戦争に備えての新式兵器各種開発と生産の成功談だ。兵器を見る限り、日本は明治維新で一世紀以上遅れていた列強産業水準に 30 年間で追いついたと言える。もうひとつの例は 2012 年 5 月号テーマ「日本は機関銃先進国であった」だ。19 世紀末、世界に機関銃が出現するとその技術をすかさず採用し、使用できたのは欧米列強と、他には「日本」だけだった。機関銃の採用は社会的には「帝国主義」の象徴だった。

2、 兵器と安全保障感覚の歴史

日本は歴史的に島国の限定された目線で国際をみる、そのために現在でも国際的に的確な状況把握には弱い面がある。また基本的に「インテリジェンス」機能が不足している。「天気晴朗なれども波高し」は良い意味でも悪い意味でも日本を守ってきた。

江戸期が終結しそうで 1868 年まで終結しなかったのは、アメリカ南北戦争のためだ。2012 年 6 月号テーマ『アメリカ南北戦争と戊辰戦争はざま』にあるが、日本は近代兵器を国産化できなかった。だが、アメリカ南北戦争が 1865 年終結すると、小銃その他小火器数十万挺、艦艇、そして大砲などの余剰兵器が輸入され、新政府側、幕府側勢力もそれらを輸入、極めて短い期間に内戦は終結した。知識がないから不必要・不適切な兵器を高額で買わされた。他列強各国は中国に専心していて、次にとふと日本に目を向けるとすでに新しい体制になっていた。その後、明治の産業基盤形成は「殖産興業」であり、特に工業は軍事が曳引した。これは産業革命に追いつかなければ新しい国家の完成が危ぶまれたからだ。軍事技術はほとんどが国家の力によるものだ。外人技術者を雇い工廠を充実させその開発、技術、生産能力を最終的には民間にも伝播させた。第一次世界大戦頃まで順調なる成功をみたと言える。そして、第二次世界大戦にかけて、例えば 2012 年 11 月号テーマの『統制経済下の日本航空機工業』だが、

日本は第二次世界大戦中に国家が限られた資源を統制し、技術を民間と共同開発して7万機の航空機を生産した。日本の航空機工業は第二次世界大戦中にかなりの水準まで達した。戦後は連合軍の方針により、航空工業基盤は徹底的につぶされ、日本は外国製航空機を民用にも、軍用にも使ってきた。しかしここに至るまでの航空機産業国際的分業化は日本に大きな機会を与えつつある。日本の第二次大戦中の軍事工業は他産業、自動車、機械、電機、精密などに転用され戦後経済成長の中心となった。したがって、国策としての兵器産業は日本の社会的成長の無駄にはならなかった。

3、国家組織上の非効率 運営見込みの悪さ

戦前の日本の正式国名は『大日本帝国』でありアジア初の立憲君主国であった。軍は陸、海軍と分かれ、日本帝国の陸海軍組織は別なもので、各々が天皇に統帥されていた。国家予算の約3分の1は軍事費であり、そのうち約3分の2が海軍、1が陸軍であったと言われている。（軍事費は日中戦争が始まると4割、5割に増え、昭和19年には9割、になった。昭和13年には実質的に国家経済は破綻していた）兵器開発は陸海軍各々が行い、制定し、工廠から自らの民間会社を設立し、養成した。例えば光学兵器、海軍は日本光学、陸軍は東京光学を立ち上げた。（発注は各々の独占ではなかった。）機関銃記事で一例としてあげたのは、海軍九六式艦上戦闘機と陸軍九七式戦闘機の胴体機銃だ。同じ目的で同じ口径7・7mmでありながら、別な機銃で部品や弾薬の共通性がなかった。同じ様な理由で全体効率の欠如は兵站意識に悪い影響を与えた。燃料が無く稼働できない戦艦『大和』とどこまでも歩かなければならない歩兵の矛盾があった。国際的にみて日本は明らかに「海軍国」であった。例えばドイツやソ連は巨大な陸軍を保持していたが、空母や戦艦は存在しないか、限られていた。日本の場合は陸海軍がアンバランスであった。（日本陸軍、海軍陸戦隊分隊兵器であった軽機関銃と擲弾筒、下 無稼働品）



陸軍の個人が運搬する兵器弾薬装具類、日本は陸上では車両輸送の限界があったので、全ての兵器、弾薬、装具を兵が自ら運搬するか、せいぜい馬載であった。各単位の兵器バランスは良くできていたが、空挺部隊と同じく長時間戦闘できない体質であった。一個分隊は現在の NATO 軍などの構成に似ていた。歩兵は小銃、分隊には軽機関銃 1 挺弾薬約 860 発、擲弾筒 1 門砲弾 16 発。補給がなければ 1 時間も戦闘できない。(分隊弾薬、弾倉 8 個、弾薬は袋に入れ分担して運んだ、眼鏡、装填器、整備用具 2 種類を身に付けた、下右)



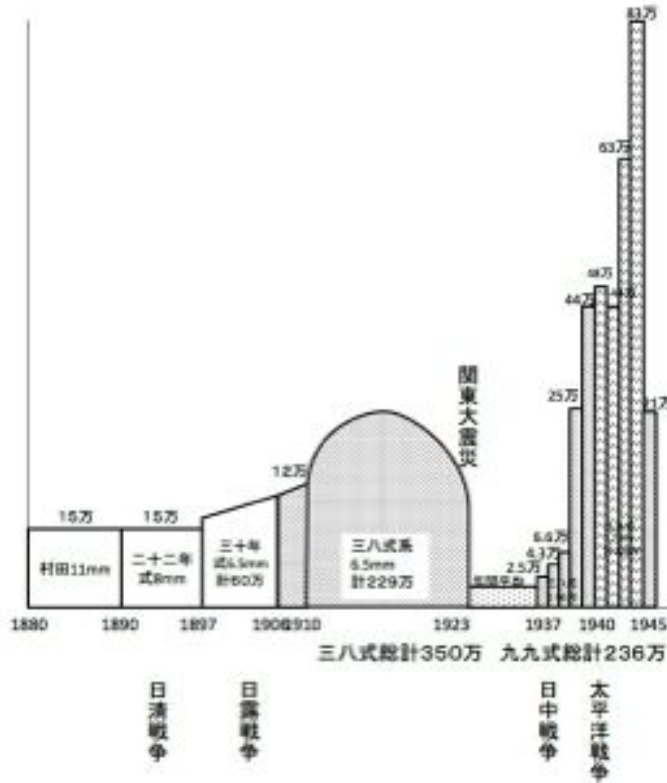
しかるに海軍は世界最大の戦艦 2 艦を建造し、厩大なる燃料を消費するために稼働力は極端に悪かった。「兵器は永遠にもたすべし」思想は 2013 年 9 月テーマだ。兵器開発者南部 麒次郎氏の考え方、功績、反面その弊害について述べた。兵器の完成度は高い。しかし開発や生産コストの問題、日本のみの独自の弾薬を使う、大規模な戦争では効率が悪い。輸出がし難い問題があった。

『兵站とか運営効率』ははじめから日本には抜けていた思想だ。また海軍と陸軍の体質に共通なものが少なかった。国家としての効率は考えられてなかった。そして軍縮条約に翻弄された 1920-30 年代があった。

第一次大戦後 1922 年ワシントン条約、1930 のロンドン条約において

日本は米英に対し、艦艇比率を 10 対 7-6 に抑えられたことだ。国家を軍事費が圧迫していたとは言え理論的には（ランチェスター理論）戦えば絶対に勝利できない状況になったわけだ。そして逆に中国大陸に進出するしか手はなかったわけだ。（日本小銃製造数のグラフ「日本の軍用銃」より、下）

日本帝国軍用小銃生産史(1880~1945)



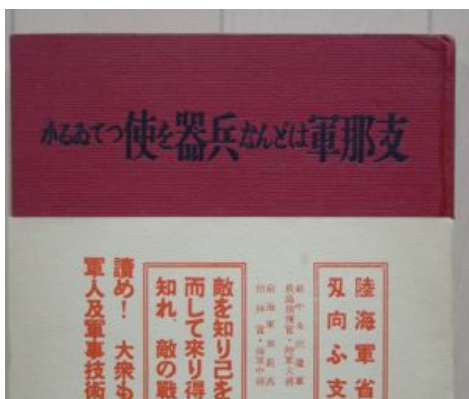
(大震災のため 1923 年から 35 年まではほとんど生産されなかった)

4、 兵器は「エンジニアリング」の粋

しかしながら、日本の幕末、明治維新、その後の歴史をみるに軍事が曳引した技術、生産力、産業は日本社会の基幹となり、先に書いたように多くの産業は現在に至る。日本は所詮エンジニアリングで活きるのが王道であろう。これは長い歴史が示していた。日露戦争に間に合った技術のひとつ、もう一度言う、2012年5月号テーマ『日本は機関銃先進国だった』に書かれているとおりだ。産業革命に明治末に追いつき鋼鉄生産量も昭和になり追いついた。19世紀—20世紀、特に第一次大戦、第二次大戦は兵器を著しく発展させた、自国で兵器を開発し、生産できる国にというのは当時から限られた工業国である。その基盤をもった日本はエネルギー供給から輸出など販売先を明確なものとし、政策として力を入れる技術に特化すべく努力していると言える。そのためには、

① 敵を知る努力

帝国日本は敵も兵器を十分に研究したとは言えなかった。自分の武器兵器が最高だとの自負があったからだ。日中戦争が始まってからも中国軍が世界各国から輸入した多種多様な兵器は民間人であった萱場 四郎氏が自費で研究した。彼の『支那軍はどんな兵器を使っているか』は戦争開始と同時に中国に渡った同氏が「支那は列強新式兵器の展覧場であり、見よ、本書に始めて発表されたこの豪華なる兵器の羅列を！」昭和 13 年（1938）、開戦の翌年に出版したこの本は日本軍が鹵獲した兵器を全て分析し、「各種飛行機や小口径火器及び防空火器を集めている国はなかろう」「思うに近代戦は精神力と兵器と用兵術の三位合体たるもので特に卓越した新式兵器は戦術を支配し得る経済軍備の根本だ」



(萱場 四郎氏が創立したカヤバ工業は現在で

も当時の技術、空母に使用した油圧技術を生かした世界的企業だ。)

現在の一般国民は安全保障にあまり関心がないから兵器もその技術にもあまり関心がない。国家よりも一民間人が気付いた意識の例であった。例えば「抑止力」と言う考え方は敵を知らねば出て来ない。



(ジャングル戦闘で有効

なる一〇〇式短機関銃も昭和 19 年までほとんど製造、使用されなかった、上)

② 技術教育の重要性

日本帝国陸海軍には 57 各種技術学校があったそうだ。現在、自衛隊 3 軍には約 30 学校ある。兵器技術だけの教育機関ではない。社会の一般の科学技術水準の

高さは必要だ。兵器は開発 10 年間と言う常識があるくらい完成度を追求、新技術を次々と投入する。担当するものの教育は途切れてはならない。これからは宇宙航空技術であろう。

武家時代より年少者への武道や精神の教育は日本の伝統であり、幕末維新で、活躍した人材を育てたのも各種の学校であった。近代になっても年少者の軍事教育には熱心で広い範囲に及んでいる。年少者への武器兵器の扱ただけでなく理論と身体を動かす教育が行われていた。現在は何も行われていない。

5、 ブレードウエポンへの愛着と武道

① 刀剣と日本の武器

日本は古来より刀剣が主要なる武器であった。明治になり武士階級の消滅から廃刀令が出され、侍が刀を差して外出することが禁止された。

日清、日露の戦闘で日本刀の白兵能力が証明され、将校、下士官の帯刀が第二次大戦まで続いた。銃剣も日本軍にとっては重要な白兵兵器だった。

明治 30 年に制定された三十年式銃剣は第二次大戦後、朝鮮戦争まで使われた。総生産数は 830 万振りで恐らく同一の種類としては世界最大だっただろう。



(古刀の切っ先，焼きにこだわった、古三原、上)

② 日本の甲冑と弓矢は優れ物であった。

格を示す、意匠に凝る鎌倉時代の甲冑、刀剣、弓は武器そのものも運用も優れていたのではないか「元寇」の際の戦闘でも日本の弓矢は海上でも陸上でも敵を寄せ付けぬ強さがあった。私は日本銃砲史の研究者ではあるが、同じく弓矢

にも興味があり研究している。総合的にみて日本の弓矢は世界一の性能があっただろう。「日本の弓矢」は 2012 年 8 月号に書いた。日本の弓は全長が 210 cmあり、矢は 1 m 近くある。複合弓で強い、長い、射た際に現代競技アーチェリーのように返る（向きは異なるが力を逃がす原理は同じ）。矢は竹で軽く、均一に出来ており、3 枚の強い鳥羽根は矢に回転を与える。竹の空洞に入った鋭い鏃の中茎（なかご）は、矢を抜いても身内に残る。竹の矢は日本でしかみない。強い弓は京都三十三間堂の 60m（きしくも現代アーチェリー競技距離）の廊下の上にも下にも当たらず的を目指すと言う強さだ。有効射的距離は 3-50m あったと言うことだ。



武士と石墨、上)

（「元寇」に備えた鎌倉

③ 日本の戦闘体質が完成されたのは「鎌倉時代」御家人、地当ではないか。

闘って恩賞を得ると言う目的意識と誇り、そして個人戦でも集団戦でも強みを発揮した体質だ。一番乗り、先駆け、夜戦、そして何よりも巧名を得ると言う目的意識は西洋の騎士以上のものがあつたのではないか。良く言われるがモンゴル帝国を阻止した世界唯一の騎士団だつた。「甲冑、刀剣、騎馬、弓矢」これをセットにして戦闘する、各々の装具、武器兵器が鋭く、使い易く、運用の鍛練に秀でていたのが、13 世紀後半の元寇の戦闘の本質であつたと考えられる。

おわりに) 歴史に学ぶか、愚かな経験だけに頼るか？

時代は分岐点にきている。世界の力のバランス変化で日本は安全保障に限らず国際関係すべてが曲がり角にかかっている。日本は島国で地勢学的には比較的他国との紛争は明治以前少なかった。国民全体が希薄な歴史観と安全保障に関する認識を深める必要性はあろう。そのために、

『日本兵器技術歴史博物館』の創設を提案したい。

世界中軍事博物館はどの国にもある。日本には各地にばらばらな、小規模な展示は点在しているが総合的なものはない。日本の軍事物を見たければアメリカに行く必要がある。こんな国はない。武器や兵器は文化・文明である。

未来永劫に現物を残す努力とその背景の研究をだれかが行わねば、先人の努力、日本の歴史のその部分は切り取られたままになる。

やはり首都圏の確固たる場所に、『日本国兵器史』を総合的に展示する軍事博物館は必要となろう。軍事技術、歴史をみれば、日本の各種技術の原点だ。日本がエンジニアリングで生きる、背景が理解できる。こういう現実をみると歴史に学ぶことは言うまでもない。日本の武器兵器の歴史を見る限り、技術、産業、社会構造、制度、国民の意識、全てを考慮する基準は、『日本は東洋に存在する西欧国であった』と言う事実だ。以上



(本土決戦用の三式戦車、75 mm砲、160両製造されたが、1両も戦闘には投入されなかった。陸上自衛隊武器学校展示)

参考文献：

萱場 四郎著『支那軍はどんな兵器を使っているか』モダン日本社 昭和13年

原 朗著『日本の戦時経済 計画と市場』東京大学出版社 1995年

松浦 正孝著『日中戦争期における経済と政治』東京大学出版会 1995年

旗田 亥著『元寇』中公新書 昭和40年

石井 進著『鎌倉武士の実像』 平凡社 復刻 2002年
戸田 藤成著『武器と防具』日本編 新紀元社 1994年
岩波講座『日本の歴史』近世 11-13 岩波書店 1977年
有馬 鋁蔵著『兵器考』 古代編より各篇 雄山閣 昭和11年
桑田 悦、前原 透共編著『日本の戦争（図解とデータ）』原書房 1982年